19世紀前半のフランスにおける女子教育論に見る知育擁護の言説（1）

小　山　美沙子

はじめに

本稿筆者は、19世紀前半の女性のための知的啓蒙書の分析を進めるにあたり、その背景を見極める手掛かりと考えられる当時の女子教育制度の検討を経て、当時の女性観や女性論の中に見る女子の知育擁護の言説を検討してきたが[(1)]、女子教育論は、より具体的な内容に言及しているだけに特に重要である。

19世紀前半における女子の公教育の整備の遅れがある中、時代の要請に合致した妻、母、主婦としての役割への期待は、前世紀同様女子教育の重要性の認識につながり、その中で女子の知育が問題にされるのは当然であった。そして、とりわけ上層階級の女子に関しては、社交界での役割や、特に自身のための精神陶冶の効用という点も又、忘れ去られたわけではなかったのである。

頁数の制約があるので、本稿ではまず、19世紀初頭（王政復古時代以前）のcomtesse de Genlis、comtesse Le Groing La Maisonneuve、Madame Gacon-Duffour、Madame de Rennevilleがそれぞれ発表した女子教育論を通して女子の知育擁護の言説を検討することにする。

Ⅰ．Genlis

革命時代、国民教育への関心が高まる中、作家で教育家のcomtesse de Genlis（1746-1830）も又、貴族だけでなく庶民の教育にも強い関心を抱き、

Discours sur la supression des couvens de religieuses, et sur l'éducation publique des femmes（1790）や*Discours sur l'éducation du peuple*（1791）で女子の公教育や民衆教育についての提言を既に行っていた[(2)]。これらも踏まえ、*Projet d'une école rurale pour l'éducation des filles*（1801）において、「女子教育は、中流以下の社会階層や貧しい境遇において最も役立つ知識や知育、才芸、美徳を与えるよう工夫されれば完璧なものになるだろう[(3)]」と言う彼女は、大多数の女子の将来の生活を念頭に置いて、実学を重視したしっかりした教育の必要性とその具体的な中身の概要を提言し、そのための国立の学校の設立を訴えた。

Genlisは、この女学校の教育プランとして、1790年の提言書同様、Madame de Maintenonが運営したSaint-Cyrの学校での教育プランに追加を施したものを提案している。すなわち、道徳を含む宗教、書き方、算数、歴史と地理の基礎知識、実生活に役立つ医療と薬の知識、日常的な植物の知識、家事や家政、針仕事、デッサンなどの他に農芸の知識、造花作りなどのあらゆる手作業、法律の知識、つまり、«tout ce qu'il est nécessaire de savoir pour régir une terre, et toutes les lois relatives aux successions, testamens, douaires, tutelles d'enfans, etc.»を教え、英語とドイツ語、イタリア語の勉強もさせるというのであった。但し、これらの語学の勉強は、「もっぱら旨く話し、散文をすらすら読み、正確に手紙が書けるようにする」ことを目指すものであった[(4)]。Genlisがこうした「現代語」（langues vivantes）の勉強を若い娘達に奨めるのは、「とりわけ、商人と結婚するか、商家に就職するか、あるいは子供達の教育に専心したいと思う若い娘達にとって、これほど有益なものはほとんどない[(5)]」と考えたからであった。

«l'éducation simple et solide, qui forme les *bonnes ménagères et les excellentes mères de famille*, a un immense avantage sur les éducaitons compliquées et plus brillantes[(6)]»と言う彼女は、女性の役割に応じた教育の重要性を相変わらず強く意識していたのであった。限られた内容ではあるが、大して関心の払われることもなかった女子の民衆教育のために、彼女はそれなりに充実し

たプランを提示したと言える。そして、知育を含めた女子の教育の重要性を彼女がここでも主張したのは、「教育によって、人のあらゆる能力を研き、発展させることができる[7]」という教育による人間精神の進歩の観念を持ち続けていたからに他ならない。

Ⅱ．Le Groing La Maisonneuve

Genlisの提言書と同じ1801年、comtesse Le Groing La Maisonneuve（1764–1837）は、好評を博した、母親向けの女子教育の手引書である女子教育論 *Essai sur le genre d'instruction qui paroît le plus analogue à la destination des femmes* (an VII)の第2版を、自身が開いたParisの女子寄宿学校の運営の経験を基に執筆した*Considérations pratiques*を付して出版した[8]。この補足的な考察は、*Essai sur l'instruction des femmes*（1844）とタイトルを変えた上記の女子教育論の第3版にも引き継がれることになる。

この考察でも、本論の女子教育論同様、女性の家庭での役割を重視する立場での知育の擁護が目立つ。彼女は、「女性達は、社会に属しているのではない、彼女達は、娘、妻、母であり、市民ではない。男性は国家に尽くす義務があり、女性は完全にその家庭に属す。家庭が彼女の世界である[9]」と、男女の役割分担の考えを明確に表明している。従って、女性が学問や芸術で秀でる野心を持つことには否定的で、「自分の若い生徒達」には「学問や芸術を重視し過ぎて欲しくない」と言っている。そもそも、有徳な家庭婦人の養成を念頭に置いている彼女は、「私が育みたいのは、彼女達［自分の若い生徒達］の知性よりも心である[10]」と述べているように、知育より徳育を重視していた。

しかし、«Les lumières ne sont vraiment utiles que quand elles servent de flambeau à la vertu, pour l'empêcher de s'égarer dans les ténèbres de l'gnorance[11]»と言う彼女は、少なくとも、伝統的な知徳合一の可能性は認めていることになる。又、本論の女子教育論で、知識そのものよりは、的確な頭の働きを重視していたが、社交界で無知と思われるか、教養があると思われるかと

いう事よりも、個人的に彼女の生徒達を知ることになる人々が、彼女達の中に«un jugement solide, une probité intacte, une modestie parfaite[12]»（下線は本稿筆者による。）を認めてくれることを著者は望んでいるのである。更に、若い娘達が勉強することの必要性の論拠を説く際、彼女は、学業は«une occupation à la fois agréable, innocente et utile»であるとか、「可能な限り貴女達が自分の知性を研くことは、神の意図の中にある[13]」という理由も挙げており、無為の防止策、楽しみとしての学習という側面も念頭に置くと共に、娘達が学問に励むことを当然のこととみなしていることも指摘しておきたい。

彼女の女学校における具体的な知育のカリキュラムの実践に関しては、算術、フランス語文法の基礎、英語、イタリア語、歴史（世界史、ローマ史、フランス史）、地理について言及がなされている[14]。特に、「正しく書き、正確で優美に自分の考えを表現することは、必要不可欠であるから」、フランス語文法の学習は重視されており、「私の生徒達の学習の基礎[15]」であるとしている。英語やイタリア語をやるのも、その諸規則を学んだり、これらの外国語の文章を仏語訳する作業が、フランス語の勉強に役立つからである。又、歴史の学習も熱心になされており、「彼女達は歴史を十分知っているので、［歴史に関して］彼女達が知らない事は何もない。従って、彼女達は、私の許を離れたら、この科目［歴史］について書かれたあらゆる書物を楽しく有益に読むことが出来るようになるだろう[16]」と断言している。自身のための学習の精神的な効用が示されているのである。この他、とりわけ思春期の少女達の保健上の指導（著者は苦慮しているようである。）の必要性が説かれており、«Il serait très essentiel d'éclairer à cet égard les mères et les institutrices, et je souhaiterais bien ardemment qu'un homme de l'art habile, rédigeât un petit traité d'hygène relatif aux jeunes personnes[17]»と、若い娘達の保健指導に役立つ母親と女教師向けの概説書を切望している。

最高の名家の娘達の母親の信頼を集めたという彼女の寄宿学校でのより

詳細な学習内容は残念ながら不明であるが、伝統的な女性の役割重視の姿勢は、決して知育を疎かにすることを意味するものではなかった。

Ⅲ．Gacon-Duffour

一方、作家のMarie-Armande-Jeanne GACON-DUFOUR（1753-1835）[18]は、小説風の体裁で、しっかりした女子教育の重要性を*De la nécessité de l'instrucion pour les femmes*（1805）で訴えた。体系的な論の展開が見られず、全体的な教育プランの提示が欠如しているが、女子の知育擁護の立場は、本書で明確に示されている。彼女は、序文で、立法者達がいつの時代も男性の教育にのみ専心し、女性の教育を不当にも「なおざりにし、ほとんど完全に捨て置いてきた[19]」事実を非難している。のみならず、これは男性にとっても不幸なことであると主張した。「公の幸福に専心した全ての政治家は、男性が有徳であるために、女子教育に気を配るよう常に忠告してきた[20]」と言う彼女は、女性の男性への影響力の重要性を認識していたのである。

彼女が教育によって養成しようとする女性は、基本的に、幸福な生活を送る良き家庭婦人であった。娘達を「一家の母親」にするのであれば、彼女達に「その所帯のために役立つはずのこと全て、心地よく平穏な生活を手に入れるのを可能にすること全て[21]」を学ばせ、「夫達に自分の趣味を分かち合わせたいという欲求」を抱かせねばならない。このために、若い娘に、家事・家政の書と思想、歴史、博物学、物理などの書を同時平行して読ませることを願って、«Je voudrais qu'on fît alternativement lire à une jeune personne Montaigne et *la Maison rustique*, Mably et *l'Art d'apprendre à filer les laines, coton*, *lin*, etc. etc.; Parmentier, *pour la culture des pommes de terre*[,] Fénelon et *la Cuisinière économe*, Plutarque et *l'Art de la manipulation du pain*[,] Buffon et *l'Education des bêtes à laine*, la Philosophie de Newton et *la Science d'une bonne Fermière*[22]»と彼女は言うのである。要するにMadame Gacon-Dufourは、家事・家政に通じた、しかも幅広い教養を持った女性という、

知的にバランスの取れた女性像を思い描いたのであった。しかも、«Je suis convaincue qu'une Femme véritablement instruite, n'encourra point le ridicule de vouloir passer pour *une femme savante* ; qu'elle aura même le bon esprit de mettre de niveau avec celles qui n'auront point eu le bonheur de recevoir la même Education[23]» と言っているように、衒学趣味に陥っていない「真の教養ある女性」を念頭に置いていた。

彼女の考える女子教育の理想は、作中の主人公Clémentine（平民の母と貴族の父から生まれ、幼くして孤児となるが、父の家名を継いだ。）が語る自身の教育と、女子教育についての発言の中でも表明されることになる。

Clémentineは、家名に見合った教育を受けるために、少女時代、ダンスや音楽、デッサンの教師をあてがわれたことがあった。しかし、彼女は、娘を芸術家にするわけでもないのに、才芸を偏重することには反対で、「自然がたっぷり与えた天分の高みにまで彼女達［あなた方の娘達］を向上させる勇気を持ちなさい。彼女達の知性を育みなさい。その魂を発展させ、強くしなさい」と言い、必要以上に才芸に費やす時間と熱意を、こうした知的、精神的陶冶に使うべきだとしている[24]。彼女は、女性が「軽薄な才芸」よりも、「知育」を好むよう育まれたならば、「分別ある多くの男性」は、「良い教育に裏打ちされた」女性の好ましさから来る «ce charme sans cesse renaissant» が存在するそうした女性の集まる社交の場（société）を常に求めることになると考えていた[25]。しっかりした女性の知育は、その魅力につながり、しかるべき男性達を引きつけることになるだろう。これは、富裕なインテリ女性が主催してきたサロンを想起させるものである。

のみならず、男女間に横たわる知的ギャップの改善の重要性にも言及し、女性達が、「男女間に少し均衡を確立するのに十分な知育」を受け、つまり、少しでも学問をすれば、「自然は男性に奴隷ではなく伴侶を与えたのだということを証明するのに必要なあの均衡」が確立し、そのことで「物事は、ひたすら旨く運ぶであろう」とさえ言っている。なぜなら、女性は、しっかりした教育によって天与の「優れた判断力が育まれ、強化さ

れ」ることで、家庭の中で信頼に値する助言者となりうるからである[26]。

他方、将来、息子達の教育者としての役割を負わせるためにも、女性にはしっかりした教育を施す必要がある。「我々の教育が入念になされない限り、我々に全く自由に、彼らの心を育み頭を啓蒙させておくのは危険であろう」と言うClémentineは、十分な教育を受けられなかった女性達の再教育の必要性を示唆している[27]。

そうした娘のひとりであったClémentineの知的形成は、彼女の賢明な男性後見人による再教育と、蔵書による自主的な学習によるものであった。彼は彼女に「無知」（ignorance）から脱出させる必要性を感じさせることから始め、「最も純粋な楽しみ、知識を獲得するにつれ、常に新たなものとなる楽しみ」として勉学に取り組ませた[28]。一方、自宅学習で教養を積もうとする彼女は、後見人に依頼して書物を購入してもらい、「自分が教養を積み、心を養うのに非常に適した蔵書[29]」を持つことができたのだった。満足な教育を受けられなかった女性達が、翻訳書や知識の普及書を利用することを推奨して、次のように言っている。

«Si ceux qui nous ont instruites l'ont fait avec négligence, réparons leurs fautes, en imitant les jeunes gens qui ont un jugement assez sain pour, au sortir du collége [sic], recommencer leur éducation. Nous jouissons de trésors qui étaient inconnus à nos mères. Les meilleurs auteurs de l'antiquité sont traduits: des hommes rares par leur génie, ont mis les sciences même à notre portée. Commencez, pour sortir de l'ignorance sur le système du monde, par lire Fontenelle. Si vous voulez vous persuader à vous-mêmes que vous ne vous occupez point de science, et cependant connaître assez de physique pour contenter votre curiosité, lisez Buffon [...][30].»

19世紀に入っても、公教育の不備な女性達にとって、男性以上に書物による知的形成が重要であったことは言うまでもない。

Ⅳ．Renneville

最後に、作家のSophie de Senneterre de RENNEVILLE（1772-1822）[31]の書簡体小説風の女子教育論*Lettres d'Octavie, jeune pensionnaire de la maison de Saint-Clair, ou Essai sur l'éducation des demoiselles*（1806）[32]を取り上げたい。これは、設定は異なるものの、形式や主張内容に類似した点が見られることから、明らかにcomtesse de Genlisの成功を博したあの*Adèle et Théodore*（1872）の影響下で書かれたものと考えられる。

1800年に12才で寄宿学校の生徒となったOctavie de Roselleが、結婚に至るまでの4年間、従姉や友人、父母との間で交わす書簡を中心に、Octavieの母親Madame de Roselleと寄宿学校の校長と思われるMadame de Valmontとの間の書簡も交えながら、女子の知育と徳育のあるべき姿が、具体的に描かれている。Madame de Valmontが理想としている女性像は、主婦としての仕事もこなす有徳な良妻賢母である[33]。しかし、教育とは「情念に対する理性の戦い」と考える彼女は、頭と心を育むことで、精神的にしっかりした女性の育成を念頭に置いていた。それには、幼児期から教育を開始するべきで、情念がまだ眠っている間に«la raison se forme, l'esprit s'orne de sciences utiles, le cœur se remplit de sentimens honnêtes»となり、「このように育まれた若い娘は、時代の腐敗を恐れる必要は何もないのです。悪徳は彼女に嫌悪感を催させるからです」と言っている[34]。

本書の中で推奨されている、あるいは、Octavieが取り組んだ学習は、フランス語（読み、書き、文法、語法）、修辞学、雄弁術、算術、歴史（ギリシャ史、ローマ史、フランスと英国など隣国の歴史）、地理（フランス、古代ギリシャなど）、ギリシャ神話、博物学（動物、植物、鉱物）、天文学と幅広い。又、作詩法の規則も幾らか教えてよいとされている[35]。しかし、外国語については、Octavieの母親が、娘に英語かイタリア語を学ばせたいと考え、Madame de Valmontも、原語での読書の楽しみと母国語の理解のために英語の学習の有益性を認めているが、本書では、まずフランス語の習得が肝腎であり、必ずしも、娘達は、「お飾りの学問[36]」に過ぎない外国

語の学習に時間を費やす必要はないという結論に落ち着いている。

読書については、従姉のJulieが、休み時間を利用して読書に励むOctavieに対して、「有益な読書で貴女の知識の量を日々増大させている[37]」ことに賛辞を送っているように、本書でも、読書による知識獲得の重要性は示されている。

ところで、Octavieは、当初Julieに、「貴女のOctavieの中にとても博学な人（une personne bien savante）を見るのを待っててね[38]」と述べ、実際、懸命に学業に取り組んでいる様子が書簡で示されている。事実、本書では、女子の知育は重要なテーマになっているのである。しかし、Octavieの母親が、«Je n'ai pas l'intention de faire de ma fille une savante[39]»と言っているように、博学な女性になることが期待されているわけではない。Octavie自身、父親からその膨大な蔵書を前に、「博学な女性になるには、これらを全て知らねばならない」と言われて恐れをなし、«jamais je ne serai *savante* ! »と言うことになるのである[40]。実際、母親は、例えば修辞学や雄弁術の勉強については、«un peu de rhétorique»、«quelqu'idée de l'éloquence»の習得を期待しているに過ぎない[41]。彼女は、娘を«une savante»よりは«avant tout une femme estimable»にしたいと願っており、«un juste milieu entre la pédanterie et l'ignorance[42]»を保つ程度のレベルでの学業を期待していたのであった。

尚、本書では、具体的な学業の効用も、部分的ではあるが、示されている。例えば、修辞学と雄弁術を少し学習させたいという母親の願いには、これらの知識を得て、優れた作品の読書をすれば、Octavieの「趣味を形成する[43]」ことができるという期待も込められていた。又、Madame de Valmontは、「他人と自身を知ることを教える教育は、いつの時代でも有益」であると考えており、歴史には、こうした倫理上の教育の意図に適う利点があるとしている[44]。又、Julieは、ギリシャ神話を、様々な芸術作品などの理解を可能にする«clef des sciences profanes»であると同時に、«sens moral»を含んでいるとして、Octavieに神話を学ぶことを奨めている[45]。

但し、読み、書き、計算以上の多様な学習は、全ての階級の女子に相応

しいわけではない。Madame de Valmontは、教育に研きをかける時間がほとんどない階級の娘達の場合、生半可な知識を得ることで、才気を気取ったり、判断力が鈍ったりするばかりでなく、真の才能があればあるで、家庭での義務に携わるのを嫌がりそれ以外の場で幸福を求めようとする恐れがあるとして、才芸（ダンス、音楽、絵画）以上に«les hautes sciences ne leur[aux demoiselles d'une fortune médiocre] conviennent pas[46]»であると明言している。一般に、とりわけ女子の場合、幅広い教養は相変わらず上層階級のものであった。

むすび

女子の知育への関心を示さなかったNapoléon政権下で、公教育制度そのものの組織化さえ実現していない19世紀初頭に、これまで見てきたように女子の知育を擁護し、その具体的な内容を表明した女性達がいたということは注目に値する。尤も、中庸を行く知識レベルが求められがちではあったし、サロン文化全盛時代に見られたような力強い知育擁護のメッセージは影を潜めているものの、この世紀にとりわけ強調される女性の家庭での役割に必要な知識のみならず、とりわけ上層階級の女性達に対して期待される多様な知識内容、知育の精神的効用（自身や周囲への）の理念などは、いずれも前世紀に既に提唱されていたことである[47]。

そもそもここで問題にした4つの教育論は、18世紀と19世紀に跨って生きた女性知識人（Gacon-Duffour以外は貴族）によるものであり、両時代の懸け橋の役割をしても不思議はない。とりわけGenlisもLe Groing La Maisonneuveも前世紀末、それぞれの女子教育論を自著で展開してきた人物である。中でもGenlisが、民衆女性の教育にまで提言をしたのは、国民教育に関心が集まりながら、女子教育がないがしろにされている現状に敏感に反応したものであろう。それも、民衆女性にしては幅広い知識の領域を提唱しているのは、女子に対して百科全書的な知育を推奨した*Adèle et Théodore*の著者らしい発想と言える。知育の裾野の広がりを見せていく19

世紀という時代の展開を先取りする彼女の提言は、特に評価に価すると言えよう。

革命の混乱を経て国家体制を固めることが急務であった時代、その基礎にある家庭での女性の役割が注目されるのは当然である。反動の時代の幕開けとなった19世紀初頭、革命の収束はサロンをも復活させていくことになる。いずれにしろ、それらは、女性が知に接近する口実となっていくのである。

註

（1） 拙論「「フランスの19世紀前半における女性のための知的啓蒙書に関する研究」への序章」（名古屋外国語大学『紀要』第20号、2000年）及び「19世紀前半のフランスにおける女性観と女子の知育擁護の言説」（名古屋外国語大学『紀要』第44号、2013年）参照。

（2） これらについては、拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書（1650～1800年）に関する一研究』（溪水社、2010年）の第2章の本文（第34-35頁）や同章の註（46）で若干触れた。

（3） GENLIS, *Projet d'une école rurale pour l'éducation des filles*, Maradan, 1801, p. 5参照。

（4） *Ibid.*, pp. 6-10参照。

（5） *Ibid.*, pp. 15-16参照。

（6） *Ibid.*, pp. 17-18.

（7） *Ibid.*, p. 13参照。

（8） 問題の女子教育論については、補足の部分も含め拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書（1650～1800年）に関する一研究』参照。尚、彼女がパリで開いた女子の寄宿学校は、彼女の教育論のお蔭で多くの母親の信頼を獲得し、「最高の名家の家庭」が娘達を託したという。（«Notice biographique» in LE GROING LA MAISONNEUVE, *Essai sur l'instruciton des femmes*, 3e éd., Tours, R. Pornin et Cie, p. xiv参照。）

（9） *Considérations pratiques* in *Ibid.*, pp. 90-91参照。

（10） *Ibid.*, pp. 84-85参照。

（11）*Ibid.*, p. 85.

（12）*Ibid.*, pp. 87-88.

（13）*Ibid.*, p. 87参照。

（14）*Ibid.*, pp. 78-83参照。この考察では、Le Groing La Maisonneuveの運営した女学校のカリキュラム全体に言及がなされているわけではない。本体の教育論の初版（*Essai sur le genre d'instruction*..., an VII）には、この学校の宣伝文が添付されており、そこでの教育内容については、«Les Institurices montrent elles-mêmes l'Ecriture, la Lecture, l'Arithmétique, la Grammaire, la Géographie, la Mythologie, l'Histoire, la Versification, les Principes de la Littérature, les Langues Anglaise et Italienne, la Forté-Piano, et le Dessin pour la partie des Fleurs et du Paysage seulement» とある。

（15）*Ibid.*, pp. 80-81参照。

（16）*Ibid.*, p. 83参照。

（17）*Ibid.*, p. 123. 引用文中の«à cet éagard»は、「12歳から18歳まで、時にはそれ以降」（p. 122参照。）もありがちな女子特有の生理に由来する体の不調とそれに対する適切な対処法を意味している。

（18）Madame Gacon-Dufourは、«Femme de lettres et agronome française»（*Dictionnaire des femmes célèbres*, p.335）で、小説、歴史書、とりわけ家政や農芸の分野で多くの啓蒙書を世に出している。例えば、有名なRoretの百科文庫シリーズのために、*Manuel complet de la maîtresse de maison et de la parfaite ménagère*（1826）を執筆した。尚、彼女は、«Fort intelligente, versée dans la philosophie et l'agronomie»（*Dictionnaire de biographie française*, tome 15, 1980, p. 9）であり、Louis XVIの宮廷で、読書係りも務めた経験もある知的エリート女性であった。18世紀末、女性をモラルの面で擁護した、*Mémoire pour le sexe féminin contre le sexe masculin* (in-12, 50 p., Royes, Londres et Paris, 1787)を発表している。

（19）GACON-DUFOUR, *De la nécessité de l'instruction pour les femmes*, F. Buisson, Delaunnay, 1805, p. iv参照。

（20）*Ibid.*, pp. vj-vij参照。

（21）*Ibid.*, pp. vj-vij参照。

（22）*Ibid.*, p. vij. Mably（Gabriel Bonnot de, 1709–1785）は、フランスの思想家、歴史家で、*Droit public de l'Europe fondé sur les traités*（1748）や、*Observation sur l'histoire de France*（1748）などの著書がある。

（23）*Ibid.*

（24）*Ibid.*, p. 174参照。著者はClémentineに、«Je n'exclus pourtant pas les talens

agréables; je veux, au contraire, convaincre qu'on peut cultiver son esprit, former son jugement, se faire des principes, sans pour cela négliger d'en acquérir»（*Ibid.*, p. 186）とも言わせており、知育と徳育、才芸の教授をバランス良く実践することを考えていたと考えられる。

（25）*Ibid.*, p. 175参照。

（26）*Ibid.*, pp. 178-179参照。Clémentineは、そうしたしっかりした教育を受けたと思われる女性の例として、«J'ai connu une femme, qui, dans toutes les affaires qui intéressaient sa famille, était consultée, et dont les avis étaient ponctuellement suivis» (*Ibid.*, p. 179)という事実を挙げている。Fénelonの*De l'éducation des filles*（1688）の第1章を引いて、しっかりした女子教育の重要性と、女性が知的教育に値するという論拠を引き出しているが、この引用の中に、«Une femme judicieuse est l'ame[sic] de toute une grande maison»という言葉もある。（*Ibid.*, p. 182参照。）

（27）*Ibid.*, p. 196参照。

（28）*Ibid.*, p. 199参照。

（29）*Ibid.*, p. 35参照。

（30）*Ibid.*, pp. 177-178.

（31）Madame de Rennevilleは、伝記辞典では、名前に«dame de»が付されていることから貴族の出ではないかと思われるが、詳細は不明である。彼女は、«une excellente éducation»を受けたが、両親が«événements politiques»［大革命のことであろうか］のせいで没落したため、家庭を支えるために、«ses connaissances littéraires»を活用して、«nombreux ouvrages destinés à la jeunesse, et qui pour la plupart eurent plusieurs éditions»を書いた女性作家である。（*Nouvelle Biographie générale*, tome 41, 1866, p.1026参照。）子供用の教化的な物語を多数執筆し、特に*Le Petit charbonnier de la Forêt-Noire, conte moral à l'usage des enfans* (in-12, 190 p., 1810)は、19世紀末まで版を重ね続けた。女子用の知育と徳育の書*Galeries des femmes vertueuses, ou Leçons de morale à l'usage des demoiselles*（1808）や、女子の徳育の書*Galerie des jeunes vierges* (in-12, 1820)なども世に出している。現物は確認できていないが、女子のための神話の知識の普及書と思われる、*Nouvelle mythologie des demoiselles* (in-12, 1821*)も出版しており、女子教育には、大いに関心を寄せていたと思われる。［*これは出版報に掲載された年代である。］

（32）本稿では、入手可能であった著者による増補改訂版である第2版（1818年）を問題にする。1825年にも、作家のMme Elisabeth-Félicie CELNART（1796–?）による第3版（増補改訂版）が出るが、内容は、第2版とほとんど変わらない。尚、

第3版の出版申告部数は、1,500部であった。

（33）Madame de Valmontは、世俗で暮らすよう育成される娘達が、「真面目な信仰心、自身の義務への愛と他人への大いなる寛容」を身に付けて学校を出て、家庭婦人となったら、最も裕福な女性も、「午前中は、家に引きこもって家庭の世話をして過ごし」、「夫に気に入られ、子供を立派に育てることが、彼女の栄光と幸福にならねばならない」などと述べている。（*Lettres d'Octavie, jeune pensionnaire de la maison de Saint-Clair, ou Essai sur l'éducation des demoiselles*, 2e éd., Villet, 1818, p. 127参照。）

（34）*Ibid.*, p. 126参照。

（35）*Ibid.*, p. 50参照。

（36）*Ibid.*, p. 208. 一方、Octavieの従兄弟は、ラテン語、英語、イタリア語、ドイツ語で交互にOctavieの父親に手紙を書くことになっており、これらの外国語の習得がほのめかされている。

（37）*Ibid.*, p.157参照。小説本については、Fénelonの*Les Aventures de Télémaque*（1699）のような道徳的な小説は良いが、それ以外の小説は、「精神を誤らせ、心を堕落させる」ということで危険視されている。（*Ibid.*, p. 19参照。）

（38）*Ibid.*, p. 4参照。

（39）*Ibid.*, p. 49.

（40）*Ibid.*, p. 95参照。

（41）*Ibid.*, p. 49参照。

（42）*Ibid.*, p. 49, p.50.

（43）*Ibid.*, p.149参照。

（44）*Ibid.*, p. 52参照。

（45）*Ibid.*, p. 76参照。

（46）*Ibid.*, p. 54.

（47）前世紀の女子の知育擁護論や具体的なその中身については、註（2）の拙著参照。